



1992年(平成四年)
12月号(No. 571)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価一部 150 円

目次

- ナムチャバルワ初登頂成功にあたって
.....山田二郎(1)
ナムチャバルワ第八信 ついに、未踏
の頂上に到達!.....(1)
海外の山.....(2)
「EAAMC」とは何か
ナムチャバルワ登山隊員スポーツ功勞
者として表彰.....(3)
IMF会議に出席して
.....大森弘一郎(3)
新・山研だより(5).....(4)
東西南北.....(4)
「おめでとうございます」「ナムチャ
バルワ初登頂に寄す」ほか
図書紹介.....(7)
「レクイエム紀行『日本女性登山史』
報告.....(8)
「国際山岳連盟(UIAA) 松本集会」
「女性懇談会御岳全国集会」ほか
自然保護随想.....(12)
会務報告.....(16)
10月定例理事会、ルーム日誌、会員
異動、山研・ナムチャ合同募金応募
状況、新入会員(復活)、住所・住
居表示変更、書籍・雑誌受入報告
お知らせ.....(18)

▶日本山岳会事務取扱時間
月、火、木、土曜 10時~20時
水、金曜 13時~20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時~20時

お知らせテロップ電話

3234
六六五九

ナムチャバルワ初登頂成功にあたって

日本・中国ナムチャバルワ合同登山隊

日本側総隊長 山田二郎

本日、永年に亘って、その頂に登ることを拒み続けて来たナムチャバルワ峰(七七八二呎)が日中兩國登山隊の協力によって初登頂されたことは、誠に喜びにたえません。

先ずもって、ここ三年間に亘って困難に立ち向かって来た日中兩國隊員の

労をねぎらい、またこの登山をあらゆる面から支援下さった官民各位に心から御礼を申し上げたいと存じます。

私共、日本山岳会は、読売新聞社、

日中友好協会全国本部、日本山岳協会との共催により、NHK、文部省、外務省後援のもと一九九〇年夏中国登山協会よりナムチャバルワ峰合同登山の

許可を得、同年秋季の偵察によって登路を決定、一九九一年秋に登山を試みましたが、昨年は天候に恵まれず、その上大西隊員の事故死に加え、天候も亦我に利あらず、今年の再攀にのぞんだものであります。

今年は昨年の経験に基づき氣象観測と予報態勢の整備を図るなど万全を期し、登山計画も昨年より半月早めるなどの対応策を構じて参りました。十月初旬より二回に亘る頂上へのアプローチは、当地でも稀に見る異常降雪と強風に拒まれ、一旦は中間キャンプ迄撤退を余儀なくされたものの、二十三日には再び態勢を建て直し、日中兩國隊

員の完全なチームワークとねばり強い超人的努力とによって、遂に、今日の栄冠を勝ち得たのであります。ご支援、ご協力賜りました会員各位に、重ねて厚く御礼申し上げます。

今回の初登頂の意義は、周到なる準備、不屈の闘志、挑むことなき努力、そして人々の友好協力の存するところ不可能はあり得ないことを示したことであり、かつまた日中兩國国民の友好と

ナムチャバルワ第八信

ついに、未踏の頂上に到達!

十月三十日、十二時九分

アタック態勢に入ってから、隊員は順次上部キャンプに登っていき、第一次アタック隊がキャンプ5に到着した翌十二日は降雪のため行動できず、釘付け状態となりました。

十五日は強風の中をキャンプ3までいったん撤退し、好機を待つことにしました。再度、アタック態勢に入った二日間も足踏み状態に陥り、第一次隊はキャンプ5に進めません。

犠牲のあったことを忘れることが出来ません。謹んで同隊員のご冥福を祈り、併せて同君のご遺族にも心から哀悼の意を捧げるものであります。

平成四年十月三十日
ナムチャバルワ初登頂万歳
日中友好万歳
(ナムチャバルワのベースキャンプにて)

その後、キャンプ3以上の滞在期間もだいぶん長くなってきたため、隊員の休養が必要と判断し、さらにキャンプ2まで退くことを決意しました。

このままでは天候の回復の見込みがないばかりか、各キャンプの物資が消耗するだけになるからです。

ちょうど日本気象協会とラサ気象局の天気予報は、ともに月末に好天を予想していました。

二十一日、サンジュ登山隊長と私はベースキャンプまで下り、今後のアタックについて協議を行ない、その結果、二十四日には登山活動を再開するという非常にタイトな計画となりましたが、中国側もこれに同意しました。

折しも、ベースキャンプには支援隊が到着していて、本来ならば登頂した隊員と対面というスケジュールを設定していたのですが、結果的に激励の声を無線を通じて送ってもらうことになりました。しかし、支援隊の声援と差し入れの品々は、焦りの色が見えていた隊員達への励ましとなったようです。

それにしても、ナムチャバルワの天候は予報だけでは窺い知れないものがあります。

なぜならば、この時期は晴れば風が吹き、曇れば雪が降る。この風も雪も登山活動に支障を来すほど激しい

海外の山

「EAMC」とは何か

「ロシアは大変だよ。給料は上がらないのに物価だけ上がって。ヨールカ祭（ヨールカはもみの木）新年の祭」もきつと静かさ」

モスクワから、旧ソ連を代表する登山家の一人であるエドワルド・ミスロフスキーが近況を伝えてきた。

十一月から一月にかけて、旧ソ連の各共和国の山岳組織がそれぞれ大会を開き、組織問題、対外関係などについて協議しているという。

「旧ソ連を代表する山岳組織は、どこか」

十月初め、松本市で開かれた国際山岳連盟(UIAA)総会で、実はこんな議論があった。

昨年まで存在していたソ連山岳連盟という組織がソ連の崩壊と共に消えた。それなら、どこがユーラシア大陸の中央部から東にかけて展開する山岳地域の登山を管轄するの。

古い組織は権利を失い、新たに独立国となった各国が山岳連盟を持つ、と二週間前、キルギスタン共和国へ行ってきたばかりのセガンティニ・UIAA会長が説明しかけたが、ポーランドの代表が「事態は、もう少し複雑だ」と遮り、前ソ連山岳連盟会長のミスロフスキーが、説明に立った。

「ソ連の崩壊後、各共和国の山岳関係者が集まって新たな組織を作った。当面共和国の登山組織が国際的な活動をする余裕はないので、以前の連盟の活動を継承する形で。ただし、これまでのようなたて関係の『連盟』で

はなく、各共和国横ならびの『協会』です。」

新しい組織の名は、『ユーラシア登山クライミング協会』、英語で言えば EAMC (EUROASIAN ASSOCIATION of MOUNTAINEERING and CLIMBING) だ。ミスロフスキーが会長をつとめる。

タジキスタン、カザフスタン、ウズベキスタン、白ロシア、モルドバなどがこの新組織に加盟、キルギスタンも支援しているという。

UIAAでは、結局この。EAMCを旧ソ連山岳連盟を継承する組織と承認した。ただしUIAA自体にはウクライナ、キルギスタンといった共和国が独自加盟、または加盟申請しており、将来はまた違った展開となるかもしれない。

広大な旧ソ連の崩壊のうち、高峰を抱える共和国としては、キルギスタン、タジキスタンなどがあるが、UIAA総会の最終日、キルギスタンから三人の登山家（二人はロシア人）がやって来た。彼らは、会議に参加することだけでなく日本の登山界にキルギスの山々での登山、スキーを宣伝する目的を持っていらしたかったが、限られた時間で十分の活動はできなかったようだ。

同じ時期、キルギスタンの観光省からもキルギス人の女性が来日、国土の三分の二が三千メートル以上の高地という天山山脈の北の観光宣伝にあたっていた。独立国として生き抜くための真剣な経済活動である。

国際山岳連盟総会が日本で開かれた意味は何だったのか、日本に何が求められているのか、などについてはいろいろ考えさせられた。そのことは別の機会にふれた。地球の政治的激動から登山の世界も離れることはできない、ということだけを報告しておく。（江本嘉伸）

ものです。しかも、これが一日のうちに何度か、目まぐるしく変化します。全体の行動率を高めるためには、隊員の強引なまでの意欲が必要ですが、へたをしないと事故につながる可能性も高くなります。気力・体力・天候の巡り合わせだけでは、再度のアタックは難しいものに思えました。

二十六日、十一時すぎに第一次隊がキャンプ4を出発し、キャンプ5に入る。積雪二層下のテントを捜し、掘り出し、テントに入ったのは時刻五時すぎでした。

二十七日は、キャンプ5から6へのルート工作および荷下げ(六九〇〇から六七〇〇)を行う。

第二次隊はキャンプ5に入り、アタックの最終態勢に入る。

二十八日には、南壁に七二〇〇からフィックス・ロープを張る。

二十九日、第一次隊はキャンプ6を

資料寄付のお願い

登山の用具、記録等、整理する時考えて見て下さい。他に寄付する前に山岳会へ。捨てる前にも再考を。

資料委員会

出発し、前日のルートを辿り、ロックバンドを突破、七六〇〇に到着、しかし、日暮れになったため、セラックの陰でビバークに入る。第二次隊はキャンプ6で待機。

三十日、不安定な雪上を三時間におよぶラッセルの末、十二時九分、ついに未踏のナムチャバルワ峰に到達しました。

続いて第二次隊も、十四時三十分に登頂を果たすことができました。

想えば長い道のりでした。私にとっても九〇年の偵察以来、三年かかりの参加となり、たいへん感慨深いものがあります。

しかし、今回の成功は偵察隊を含めて、参加した隊員達の登高意欲とともに、皇太子殿下をはじめ、会員の皆様の温かいご支援の賜物と思っております。資金および装備等の物資の調達、梱包作業をお手伝い下さった方々、登山委員会、実行委員会、事務局、名誉

総隊長、支援隊の皆様、改めて感謝申し上げます。

長い間、私達岳人の羨望の的であったナムチャバルワは、その頂上を日中合同登山隊に明け渡しました。

私たちは、これまでの経験を基にしてさらなる次の高揚した希望を持たなければなりません。

最後に、ナムチャバルワ登山の先頭

ナムチャバルワ登山隊員

スポーツ功労者として表彰

文部省は十一月六日の閣議で決定されたとして、閣議後の記者会見で鳩山邦夫文相が明らかにした。

今回受賞の対象になったのは、日中合同ナムチャバルワ登山隊の山田二郎総隊長以下十一名の隊員で、受賞理由としては、気象条件が極めて

に立った故大西隊員の魂の安霊を祈ります。

十一月十日 ラサにて

重廣恒夫・記

IMF会議に出席して

大森弘一郎

インド登山財団が主催した、ヒマラヤン・マウンテンエアリング・アンド・ツーリズム・ミート、と言う会議で、ニューデリーで十月二十一、二十二日に、さらにアッサムのガハティで二十四、二十五日に、と行なわれ、これに出席して参りました。

これへの出席は、実は山田会長への招待に対し、会長はナムチャバルワへの出発で行けず、松田副会長は留守本

悪く、技術的に困難な、世界最高の未踏峰、ナムチャバルワ峰の初登頂は、わが国登山界の今後の発展にも大きく寄与するものと思われる。

今回の受賞はスポーツ振興基金、「卓越スポーツ」の分野では初の受賞であり、登山界としては、田部井淳子会員の二度の受賞につぐ三度目の受賞。

部長で、神崎理事は重要な仕事で出られない、と言うことの代役として急に決まり、つい気軽に引受けてしまったものでした。

ところが出発の前夜、同行する田部井淳子さんから、「プログラムを見なおしてみたら貴男のスピーチの出番があるわよ」との電話。会長の代役ですから、会長が話されたいことはどう言うことか伺って、英文の原稿まで電話で送っていただくよう、何も知らされずにバトンを渡したのだからと、神崎さんを責めて、お嬢さんから文章を送ってもらおう、と大さわきをして出発しました。

機内では辞書と首っぴき。デリーに着くころには何とかまとまっていたが、十分の持ち時間に対し、何度読みかえしても五分で終わってしまうのに

は参りました。

IMFは、ニューデリーの中心の小さい丘の上にあります。招待を下さったキャプテン・コリーには、IMFへのJACCから記念品として歌舞伎の形を贈り、喜んでいただきました。会議は、大臣による点火式とスピー

新・山研だより(5)

十月二十二日 快晴 羽田フィルムビデオ委員長が同行、工事状況をビデオに収録。

十月に入り連日の雨のため工事は遅れている。二十日には外壁が張り終えているはずがまだ張ってない。

十一月十日 小雨後小雪 外壁、石



完成まじかの新・山研

もう上高地は冬のおとずれ、工事の人々にはつらい日々であるが、関係者の努力のおかげで、平成五年のゴールデンウィークにオープン出来るでしょう。

(小倉茂暉・溝口洋三)

チにはじまり、インド各地からの代表者を含む多くの方々が、約十分ずつ、次々に演壇に立つ、という形式で進められました。その中にはクリス・ボニントン氏も居られ、またドイツ山岳会からの参加もありました。日本からの参加は、HATJの田部井さんと、

張りはほぼ完了。内部の壁も床も進んでいる。十月の長雨での遅れを取りもどすため、工事関係者は連日夜七時すぎまで頑張っているようだ。

照明、内装、上水道、下水道工事の細かい打ち合せを行った。下水工事は環境庁側は十六日、営林署側は二十、二十三日に完了予定。その他、内装、厨房など設備関係なども含め十二月十日をめどに完了するよう松本土建にお願いした。

ヒマラヤ協会の尾形さんと私の三人です。

それらの内容は、アドベンチャーの重要性、青少年の教育、外国人への地域の開放、環境破壊の防止、予算、新しいアドベンチャースポーツ、女性の登山への進出と成果、ヒマラヤ地域での清掃登山、等に関するもので、内容の理解は不正確だったと思いますが、これらの問題に対する熱意の大きさは十分に理解出来ました。参加者は三〇〇人ほどだったと思います。

新しいアドベンチャースポーツ(パラグライダー、筏降り等)も導入し、登山者やトレkkerに開放する山岳地域を広げる。すでにシッキムの許可は二十四時間で取れる様になったが、さらに簡略化する。

近く青少年のアドベンチャースポーツ大会をやり、これに政府が賞を出す計画があり、これにより、アドベンチャースピリットの青少年男女への教育をする。外国からの旅行者をより多く招く上で、自然保護を充分に行ない、ヒマラヤの環境破壊を防ぐ、というのが全体を通して語られたことであつたと思います。

私が話したことは、HATJの東京大会の内容と成果、これへのJACCの協力、この後のHATJの活動、またHATJの活動に刺激されて、

我々を含めて、多くのグループの活動が活発になったこと。そしてその実例の紹介。というもので、話しながら、これからもっと実績を上げたい、との思いにとらわれたのが本音です。

思いがけず、アッサムにも入れ、ガハテイのネールスタジアムで歓迎を受け、ナムチャバルワから流れて来るブラマプトラの大河にボートを浮かべてのランチ等、実に楽しい日々であり、IMFのキャプテン・コリー、ITBPのフカムシン氏をはじめとする多くの方々による歓待を通して、インドの山を皆様にすすめて、また自分自身もぜひ行きたい、との思いを強く持ったのでした。



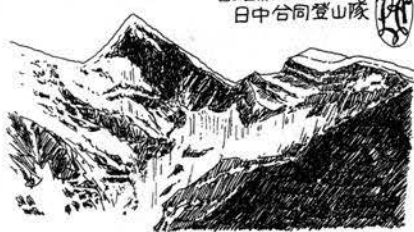
おめでとうございます

金山淳二

ナムチャバルワ成功、おめでとうございます。昨夜NHKで知り乾杯しま

南迦巴瓦峰 [7782米] 初登頂 1992.10.30

国家正常化20周年記念
日中合同登山隊



ヤルツアンポの深き谿間に育まれ天より落つる峰ぞ険しき

初登頂に寄す

宇都木慎一

ナムチャバルワ

編集部宛

十月三十一日付

した。関係の皆様御苦勞様でした、厚く御礼申し上げます。予定より早目に進んだようですが、一次で二パーティー登頂は素晴らしい、これは天候に恵まれたことはもちろんですが、日中両国のコンビ、技術水準の高さ、隊員の頑張りによるものと確信、感激です。

十四日登高会あり、山田隊長それにて何とかなに合うよう帰れるらしく、その報告を聞くのを楽しみにしています。まずは取急ぎお祝いまで。

青きケシの花咲く幻の山潜むる峰の今はあらわに

風雪に阻まれ撤退くりかえし好天掴む忍耐のすえに

ナイプンとナムチャバルワに掛橋をわたすがごとく雪壁を攀じて

頂に仙人の住むという峰いま登られて足跡のあり

宿願の初登頂のなされしころ南極隊は雪原に発つ

輝やける小さな星になりし君ナムチャバルワを目守りたまえり

ソリをひく若者三人極点へ君が遺志のせ歩み続ける

初登頂ナムチャバルワは日中の掛橋となりて天空に聳ゆ

(一九九二年十一月三日)
カットも筆者

オーストリア

ハンスの丘と氷河歩き

坂倉登喜子

今夏も第十六回のヨーロッパ・アルパイン・ツアーで、去る八月十二日より二十三日まで、全行程快晴に恵まれて、事故もなく無事十二日間の旅で、目的のエーデルワイスの群落にも出会い、実り多い内容豊富な「花と氷河」の山行をすることができました。

ツェルマットではレベル、目的、年齢などを考えて、A、B、Cと三班に別れて、マッターホルン・ヘルンリ小屋、クライン・マッターホルンなどへ、目的のエーデルワイスはシュワルツ・ゼーの丘や、オーバーロート・ホルンの秘められた斜面で、今年も沢山の花たちが、凄く綺麗な姿を見せてくれました。

た。

その少し先の氷河に下って、安全に歩くため、ザイルを使って三十六名が青氷のクレパスをのぞきながら歩いたのは「花と氷河」の旅の最後を飾る印象的なものとなりました。

帰路はサウンド・オブ・ミュージックの舞台となったザルツブルグに寄り、ミュンヘンで本場のビール飲み放題のお別れパーティを最後に、十分できたジョッピングのお土産を持って帰途につき、飛行機が成田に着いた時にはああ、無事に帰国できたのだと喜び合い、十二日間の友情に別れを惜しむ人達もいて、また会う日までの歌のようにスイスへの思い出を胸に、いつの日にかの出会いを楽しみに各地へ別れて帰って行きました。

今西錦司先生をしのぶ

八十二歳の成人登山

大谷 優

強風とアラレの中で

冬の山の気象は変わりやすい。一九八四年一月十五日八時五十分、高千穂河原は小降りの雨だった。四合目ごろから、風と霧が吹き流れ視界は五層。やがて小雨はアラレに変わった。お鉢へたどる直登ガレ場に、峰から



故今西先生、恒例の山頂の儀式？

吹き降ろす風は容赦なく襲ってきた。アラレは、まるで機関銃のような音を立ててウインドヤッケをたたきつける。肌で感じる風速は二十分に近い。これは危険だ、とても馬の背越は歩けないぞ。岳友に下山のサインをすると同時に、今西先生に同意を求めた。だが、返事はない。

岳友たちを風の盾となし、先生の真横と一緒に歩く。数歩も登らない時、突風で先生が倒れかかった。その一瞬、先生の頭を両手で支えながら二人とももんどり打って倒れた。先生にケガはなかった。アゴでの受け身は幸い唇の中を切ったに過ぎなかった。ハンケチをかみ締め、再び風に倒れないよう有

無を言わず、先生の左手をガッチリつかみながら峰へと登った。

これまでの登山で、一度の介添えもなかった先生の登山。不本意を承知での行動は、老いてなお燃ゆる青春の心意気を大事にしたかったからである。登山開始から三時間、前人未到の「千四百山」目の山「高千穂峰」に立たれた。

巡礼の道遠かり

気温が下がり荒れ狂う峰をキッと見上げながら、つえを突き素手で登られた頑固で気丈な先生。「悪天候は神のみそぎだ。私の成人式だ」とおっしゃる。その頑固さと明治男の気骨が魅力的で人間としての年輪の大きさは、「歩々清風起」の言葉が先生にはふさわしい。

「千三百山のしおり」の自序の一節に、「これから先、私が選ぶ道は、ある時点で私の登山が完成したことを認めるか、それとも細々ながらいつまでも完成ということのない巡礼の道が続いていくか、この二つのうちのいずれかであろう」。正しく先生の山登りは、果てなく続く巡礼の道であった。

峰の小屋での祝杯の焼酎。しきりに先生が勧める。五臓ろっぷに入る前に悲鳴を上げて飛び上がった。声たてて笑われる先生を憎めなかった。切れた唇の消毒という優しさだったからであ

ナムチャ登山 山研改築 合同募金に協力を！

「山はいっついてもよいね」。峰の小屋に掲げられている先生の色紙を見る度に、限りなく山への夢をかき立ててくれる。

翌一九八五年十月二十一日、椎葉の扇山は千四百九十九山目。八十四歳の十二月二十日、兵庫県の高丸山で生涯登頂数「千五百五十二山」。最後の登山となった。

先生には、日向の山で登りたかった一つの山があった。それは、緑いっぱいの大河内の三方岳。いつも自筆の速達でくる山行計画のお便りがこの秋、そっと届くような気がしてならない…。

登山の先達

都井岬ふたたび訪ね海を見る今西錦司山の先達

海に浮く幸島眺めにっこりと師の語りたるさるたちの夢

酔うほどに言葉多かり先達に負けじと語るわれを忘れて

これほどの味は知らぬと師の食べる速日の峯のめざしてんぶら

一点を見つめし山の先達のうたげに歌う牧水のうた

先達の君よ静かに海眺む都井の岬の夕べかなしき

●京都支部だより

今西錦司氏追悼特集号を頒布

「京都支部だより27号」―今西錦司氏追悼特集を頒布します。B5判二十八頁で、内容は「支部設立の構想」（今西錦司）、「高丸山が最後の山」（高木志茂子）、「ドクターの診た「怪物」今西先生」（斎藤惇生）ほか支部会員、会友の追悼文十三編。一部三〇〇円（送料一七五円）。

申し込みは⑥603京都市北区紫野上築山町四三―三、杉山イタル方日本山岳会京都支部へ。

南極点探検隊より

お元気で過ごしのことと思います。

私たちは十月十九日に日本を発ち、チリのプンタアレナスにやってきました。長い準備の末にようやくこの地に辿り着いたという感じです。これまで長い期間に渡る皆様方のご厚情に深く感謝申し上げます。ありがとうございます。

マゼラン海峡に面するこの南米最南端の町から、十月三十一日に南極大陸に向けて出発いたします。

編集部宛 九二年十月二十三日

図書

紹介



レクイエム紀行

宏よナムチャバルワ峰に

輝く星になったのか

大西俊章著

著者大西俊章氏は、昨年十月十六日ナムチャバルワ峰で雪崩遭難死した大西宏君の父君である。「名古屋文学の会」会員そして詩人でもある。

大西宏君は知る人ぞ知る明大山岳部OB、世界の植村直己の後継者と目され、第一次ナムチャ登山隊の文字どおり、エースであった。その遺体はおろされC2に安置されていた。

本書は表題のとおり、未知の遠い中国東チベットへ息子の遺骨を引き取りに行くための異常な旅行、痛恨極まりないレクイエム紀行を日を追って日記風に綴ったものである。同行の遺族は父

(俊章氏)、母(和子さん)、姉(美穂さん)の三人。三人とも登山は全くの素人、その上俊章氏は体が不自由。しかし、親子の情愛は悲愴なまでに深い。宏よ

免罪符があるなら、

ひとつとして登攀の苦しみにな人生の意義と理解を示せなかった軟弱な父を許し給え。

JACからは二人の会員が同行、旅は九一年十月二十日から始まっている。辛苦の旅であった。筆者は「針の筵」と表現している。そしてC1下、カルカでの「ダビ」。宏の「ダビ」は悲しい野火のようだった。全部をのせることができないのが残念だ。

チベットの白き神がみよ永遠の喚声のなかに湧きあがる現象としてまだ暗い星座のひとつに加えてほしい

吹きつける十月の雪の登攀者である宏よ静かに

鋼鉄のように眠ってほしい長男の遭難死という、異常・混乱の旅の中で、よくぞこれだけのものをま

次代に残そう美しい山と溪

とめられたと思う。さすがである。な

にをかくそう筆者も支援隊の一員としてほぼ同行の旅をつづけていた。だからその内容の正確さ、そして優れた文章力と感性がよくわかるのである。

本年十月三十日、ナムチャバルワ峰は遂に登られた。スポーツ功労者表彰に輝く栄光の陰にこのような「空しい」と眩く悲しい遺族の物語が存在するのである。私は思わず涙を誘った。

一九九二年九月二十日 崑崙舎刊
A5判 一七七頁 非売品(ただしJAC図書室に行けば見られる)

(小倉 厚)

日本女性登山史

坂倉登喜子

梅野 淑子 著

本年十月十八日、坂倉先生の『日本女性登山史』がNHKのラジオで全国放送された。紹介のアナが驚いた声で「坂倉さんは今ここへ登山服姿でお見えになりました」といった。先生は「ハイ、私は今朝、長野県の高ボッチと鉢伏山の二つに登って参りました」と静かに答えられた。本書は我国初の女性登山史で、貴重な稀書である。そこが放送になった理由と考えられる。

本書は七章から成る。第一章「女人禁制と女性の登山」で「女人禁制」の

研究論文から始まり、富士山外三峰の女性初登頂者の研究が並ぶ。第二章は「近代登山の黎明」で野中千代子富士山頂七十二日の苦心談から学校登山の始まり、日本山岳会の創立、女性会員第一号、女性アルピニストの登場で終る。第三章は「近代登山黎明期の女性登山家たち」で中村テル(最初の女性山岳会創立)今井喜美子(岩登り)ほか七名の評伝が異彩を放つ。取材はさらに広汎となり、武原はん(地唄舞)四谷文子等十名の異色ある登山家の事蹟が語られる。第四章は「社会人登山」でその変遷と歴史が明快に追跡され、第五章は「学校登山」で、多くの資料を極めて要領よく記述される。第六章は「登山者につくした山女たち」で六人が登場し先生との交流や人物論が心温まる筆で描かれる。最後の第七章が「海外登山」で、世界の山で活躍した日本女性が列伝風に登場する。中でも先生率いるエーデルワイスクラブがヒマラヤに出発直前、ネパール政府の登山禁止に遭い行先を変更、アンデス山群に向ったが、目標のネパド・プカランラ峰では頂上まで一四〇メートルを残して巨大クレバスに阻まれ敗退、関田美智子はマッキンリー峰で、女性のみの登山隊初の遭難事故に遭ったことが報ぜられる。

以上のこの稀書は全国的な資料蒐集

報告

と最新の史料(本年六月)を含む膨大な史料、巧妙な分類方法、多量の鮮明な写真(九十六年前のものもある)で日本女性登山の全貌を明らかにした。
値段はわずかとバコ八箱分。我々会員は常識としても一読の価値があり、

参考書としても一冊を座右に備えるべきであろう。
一九九二年八月二十一日 大月書店
刊 本文一五三頁外年表二八頁 A
5判 定価一六〇〇円
(河野幾雄)

国際山岳連盟(U I A A)

松本集会

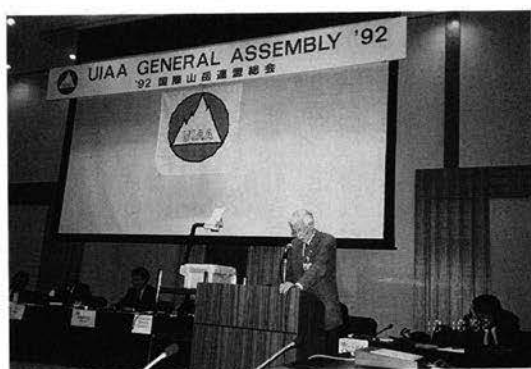
国際山岳連盟(U I A A)が一九九二年十月八〜十一日の四日間に亘って松本市で開かれた。これは、松本市の全面的な協力を受けて、U I A Aの加盟団体である日本山岳協会が準備したものである。U I A Aは加盟国四十九ヶ国、六十五山岳団体からなる組織であり、本部をスイスのスイス山岳会内に置き、毎年春(四月末〜五月始め)に理事会、秋(九月末〜十月始め)に総会が開かれ、また八つの委員会が、それぞれの委員長国を中心に、年二回から三回会議を開いている。日本も十八ヶ国からなる理事国の一員として参加しているが、今回の松本での開催によって、過去、理事国で総会を開いていない国は日本だけという汚名は返上されることになった。

今回、日本での初めての開催の特長

として、今迄あまり出席しなかった珍しい国からの参加があったこと、また出席者の多くが各山岳団体の会長であったということである。珍しい国からの参加と言えば、スペインとフランス国境沿いのピレネー山中に位置するアンドラ、ブルガリヤ、クロアチア、中央アジアからは、天山を持つキルギスタン、イラン、アジアから初めての参加、マレーシア、オセアニアからニュージーランド、はるか南米からは次期開催国のチリ、そして南ア連邦、その他、直前に参加できなかったエストニア、ウクライナ、ルーマニア等、昨今の国際政治情勢を反映したユニークな総会であった。

十月七日早朝、会長始め本部役員の一は成田に到着。そのまま松本市に直行、到着後直ちに、翌日からの会議のための本部役員会を開いた。翌、八日、午前中、委員長会議、午後は、場所を新設なった県民ホールに移して、同時通訳付きの理事会が開かれた。冒頭の会長報告にみられるように、今回の総会は、三つの大きな課題をとりあげるということである。そのうちの一番の問題は、約六十年の歴史を持つU I A Aがその機構を変える時期にきているのではないか、機構をいかに改革していくかということとを討論する。第二に、スポーツ・クライミング競技がオリンピックの正式な種目になる第一ステップとして、U I A Aが国際スポーツ連盟(G A I S F)の加盟を承認されたこと、それに続いて各国山岳団体がそれぞれの国内のオリンピック委員会への働きかけが必要であること。第三に、昨年十一月東京でH A T T J(ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト・オブ・ジャパン代表 田部井淳子)主催による環境会議の意義にふれ、今回、松本集会においても、従来の集会とプログラムを異にして、委員長会議と理事会を一日で終了、総会を一日繰り上げ、最後の日を丸一日、U I A A総会出席者全員と地元の人々(松本)を加えた環境シンポジウムを開くことである。これは、従来と違ったU I A A集会での初めての試みであった。

委員長報告のなかで主なものをひらいてみると、安全委員会(マルティン・ショール委員長・スイス)は、イギリスより提案があった旧ソ連、東欧でまわっているピトン、カラビナ等の器具まで、テストを繰り返し、安全基準を設けてゆく。
遠征委員会(ジョス・ウイナム委員長・アイルランド)は、山のアホスト国、とくに中国、ネパール、パキスタンは連絡を密にするためにも是非委員になることを希望する。現在の課題は、最近、高騰する入山料の問題、また、リエゾン・オフィサーに対し、もっと登山の知識と訓練の必要性があること、そこで、U I A A登山委員会、I M F(インド登山財団)、B M C(イギリス山岳協会)と協議し、英国の登山ガイドを一九九三年インドに派遣し、実質的なレクチャーを開く。今後共、さらに、U I A A自然保護委員会、並びにH A T T J、H E T(ヒマラヤン・エンヴァイアメンタル・トラスト)H A T T Jの母体)と連絡を取り合い、遠征における環境保護の問題を積極的に取り上げU I A A倫理規定に合う遠征隊を出したい。
自然保護委員会(ルツ・チキン委員長・イタリヤ)は数々の活動を報告したあと、毎年九月十九日、二十日をグリーン・マウンテン・ディとして恒例化し、国際的な伝統行事としたい。従って各国の山岳団体は、この日をともに銘記して、世界的な環境活動の一環として協力をお願いしたい。
登山委員会(アラン・ブラック



会 場 風 景

ショー委員長(英国)は、ドイツ山岳会、オーストリア山岳会と共催したスキー登山シンポジウムの報告、雪崩の研究、調査、現在、UIAA標準訓練規準を作成中、一九九三年に発表したい。登山委員会も、UIAA自然保護委員会、HATJ(J)(HET)と連絡をとり合い、すべての行動はこの自然保護の裏づけのもとに行う。

岩登り委員会(アイヴォール・デラフィールド委員長(英国))は、年々スポーツ・クライミングの人口が増加、とくに昨年東京でアジアで始めてワールド・カップが開かれ、世界各国から選手を集め大成功を収めた。また今、神戸でワールド・カップが大々的に開

かれている。また地域大会である、コンチネンタル・チャンピオンシップが、やはり初めて韓国で開かれようとしている。このように、ヨーロッパ、アメリカはもとより今、アジアにおいても活発に活動が広げられている。このための会議が香港で開催されたし、第二回の会議が七月北京で行われた。それに伴う訓練コースが、フランスからのインストラクターのもとに、香港、東京で開かれ、十二月には韓国で開催される。このような世界的な広がりは、必ずオリンピックの正式種目として取り入れられるものと信じる。さらに、日本に対し、韓国、香港の他、日本も是非、委員として参加して欲しい旨の要望があったが、日本は諸般の事情で委員として協力することはむづかしいと断らざるを得なかった。

その他、医療委員会、青年委員会、広報委員会から報告が行われた。

十月九日、九時より、松本県民ホールの国際会議場で、三十二ヶ国、百二名の代表を集めて総会が開かれた。議題は左の通りである。

一、一九九一年九月二十八日、プタペストにおける総会、諸事項の承認

二、会長報告

三、事務局長報告

四、各委員長報告

五、スポーツ・クライミング競技のオ

UIAA 松本アピール

(原文・英文)

UIAA松本会議で、山岳環境保護に関して、我々は次の様にアピールする。

一、ヒマラヤ環境トラスト(HET)が出した行動規約(※)のような、行動規約をつくり、その自己規律を遵守することが、山岳に於ける環境を守る力を握るであろう。

そして、山岳を開かれたものにするアクセスを維持していく上で資するであろう。

またこの規約を広く配付することが大いなる前進に結びつくであろう。

二、例外的な状況についてのアクセ

オリンピック正式種目参加の問題

六、会計報告

七、UIAA機構改革

八、規約変更

九、総会開催規程の承認

十、選挙

十一、新入会員の承認

その他

この中で最も議論が白熱したのは、UIAAの機構改革であった。結論として、各地域ブロック毎に提案をまと

スの制限については、それぞれの国の山岳協会、HETとの合意のもとで考えなければならない。

三、山岳環境保護に対する努力、方法の中では、情報、教育、そしてPR活動は重要な位置を占める。

四、UIAAの山岳保護活動に於いて、政治的な関わりは不可避である。

五、登山の将来は、観光法の傾向をコントロールすること如何にかかわっている。これは人間文化や経済・社会の発展に競合することなく可能であろう。

〔編者注〕『山』五六六号十一頁、HETによるヒマラヤ・コード

「ヒマラヤで正しく行事するため」に参照。

めて、討議を進めることになり、その委員長として、スイス山岳会会長クロード・クリーク氏が選ばれ、ヨーロッパ地区から、オランダ山岳会会長トレナル氏、本部からフリッツ・メルツ博士、等、アジア地区からは日本が選ばれ、機構改革の案を提出することになった。これに関連し、来年一月末日に、東京で、東、東南アジア(日本、中国、チャイニーズ台北、韓国、香港、マレーシア)の諸国が会合を開き、機構

改革の討議することになった。

選挙では、会長の任期切れのため、選挙が行われたが、全員一致で現会長セガンチーニ博士が再選された。また副会長であった、日本山岳会名誉会員でもある、もとIMF総裁のサリン氏が辞任することになったが、その後任副会長を日本が引き受けるようにと各国の代表から、また会長からも強い要請があったが、諸般の事情により、とても日本では引き受けられないのでお断りしたが、一年間の猶予期間がもうけられ、ペンディングとなった。

新入会員としては、スロベニア(二団体)、リトアニア、クロアチア、ルーマニア(二団体)、ウクライナ、エストニア、オーストラリアが承認され、キルギスタン、インドネシアは、来年度の総会で正式加盟が認められるはずである。また名誉会員として、エドモンド・ヒラリー卿、他一名が選ばれた。

最終日、十日、UIAA総会で初めての試み、環境シンポジウムが開かれた。これは、昨年十一月、会長のセガンチーニ博士がHATJのシンポジウムに参加し、それにいたく感銘して今回の試みになった次第である。日本からは、HATJの代表、田部井淳子氏が、エベレストでの体験と、その後の意識の変遷について語り、日本ヒマラヤ協会の尾形好雄氏は、群馬岳連

が行った冬期エベレスト登山における実際の体験と、問題点をあげ、とくに降ろしたゴミの最終集積地の問題点等、なまなましい報告をした。その他、パキスタンからはパキスタン山岳会長のミルザ将軍が腰痛のため、出席できなかった。登山隊と受け入れ国に關しての問題点を、サファドール・ブット博士が代読した。最後にUIAA自然保護委員長のイタリアのルツ・チキン博士が自然保護に対する考え方を話し、続いて三つの分科会に分かれて討論を行った。

第一分科会はスイスのアベツヒヤリ博士が座長を務め、伝統的な山国の経験から現在の問題点を討議し、第二分科会は、オランダのレオポルド氏が座長となり、世界的視野におけるアルピニズムの将来的展望について討論が行われたが、山登りと環境保護はそれ自体矛盾をはらんだものであり、山を登る以上、如何に保全に取り組むかは、すべて教育にかかわるしかないと話し合われ、第三の分科会は、インドの、キャプテン・コリーが座長となり環境保護に關しての役割の分担について討議がなされた。

最後に、本会会員でもある、読売新聞編集委員の江本嘉伸氏が総括をし、松本アツピールを読みあげ、シンポジウムを閉会した。なお、このシンポジ

探検と学問の分野に
特異な足跡を残した巨人の実像に迫る

評伝
今西錦司

本田靖春 好評発売中！

●定価1900円(税込) 四六判上製/384頁

1992年6月15日、独自の進化論を提唱した京大名誉教授で、文化勲章受賞者・今西錦司氏が亡くなった。享年90歳のことである。氏は京都・西陣の大きな織元に生まれ、1中・3高と進学するなかで多くの俊英の知遇を得、やがて登山と探検に卓抜したリーダーシップを発揮する。一方、志した学問は一分野にとどまることなく、独自の自然学を提唱するに至る。そんな自由奔放に生きた今西錦司氏の足跡を追いなら、巨人の実像に迫るノンフィクション。

山と溪谷社

〒105 東京都港区芝大門1-1-33
☎03(3436)4055/FAX03(3433)4057



た生証人、今井喜美子さんを紹介した。

人間には運命を感じますと言いながら七歳から八十年山に執着と執念をもち続け、勉強して経験を積みながら、きちんとした山登りの姿勢を崩さずおおらかに山を楽しんできたこと。スキーで腰まで雪崩に埋まったこともあったが怪我もしなかった。山でも危険は多かったが運が良かったのだと、朗らかに転婆の話題を提供された。

二人目の坂倉登喜子さんは『日本女性登山史』出版について、本の出来上る迄の裏話だった。

日本山岳会の百周年に完璧な山岳博物館を作った、その中に女性コーナーを作り、女性の歴史を飾りたい夢を持っていること。「山岳博物館を考える会」を作ったこと。八十年記念行事に山岳展を開催して女性コーナーが好評だったこと等が、本を作ることにつながった。装備、写真、年表等を基にしても女性の資料を集めた記録が少なく難儀をした。如何に歴史が大切な記録が大切であるかを説かれた。

三人目の梅野淑子さんは坂倉さんと共に『日本女性登山史』の著者。

山岳博物館を考え婦人懇談会の時思いついたが、本を作ることは地味な仕事で、山に登る人は大勢いてもなかなか集まらず、今回二人で作ったが女性懇談会として出版したかった。本人の

〔自然保護随想〕

避難小屋を清掃する

九月の土曜日曜、東北の名山、船形山に四人で登った。升沢避難小屋か、船形山頂小屋に泊る予定であった。

升沢には、昼前に着いた。周囲はヤブ、床の一部が落ちていて、小屋の中は暗く、湿っていた。山頂小屋まで頑張ることにして、水を汲んで、沢道を思い思いに登る。

山頂小屋が見える尾根上に出たら、TとS（共にJAC会員）が、青いシートを広げているのが見えた。

二十五分遅れて船形山頂に登りつくと、小屋の中を掃いている最中であつた。青いシートは小屋に敷いてあつた物で、小屋前の草原に広げて干してあつた。私と一緒にゆっくり登ってくれた、まめなKが、すぐに掃除を手伝い始める。小屋の隅には、空きビンとカンなどの小山ができる。

ひと区切りついたところで、乾いたシートに座り、ワインを抜き、今回のシェフTの作るつまみを食べ、青空の下宴会となる。

ビン・カンを持って下りたいけど、四人では多すぎる

ね、と。Tは自然保護精神が旺盛で、JAC自然保護委員の私が、恥かしくなるくらいだ。

お湯を湧かし、ティーウイスキーで、涼しくなった体を温めて、宴会の終りに近づいた。福島男性三人と、宮城県の中年夫婦が到着した。シートを小屋に敷き、三パーティが場所を決め、夕食の仕度を始める。

私達のパーティには、料理上手なTとKがそろっている。豪華な夕飯ができあがる。同宿の人たちにも少しずつお裾分けして、お互いに一夜の友となり、歌がでて盛り上がる。

宮城の夫婦は、「何回も来ているけど、こんなきれいなっている小屋は始めてだ」と言う。水がたまつたシートを干し、床を掃除したことを話すと、「東京の人に掃除してもらって申し分けない」と名刺を出す。船形山のブナを守る会とあつた。

明朝、燃える物を燃して、ビン・カンは手分けして下ろししよう、とT。

Tの積極性と人なつこきに脱帽する。こうすれば、汚ない避難小屋もきれいになるのだと、同宿者一同、良い勉強になった一夜であつた。

(山口悠紀子)

記憶よりも著書があると良いこと。年

表等は学校の山岳会は学校史にあるが、職場山岳会は記録も資料もなく調べにくいこと等話され、服装の変遷と遭難は省略したと結ばれた。

四人目の遠藤京子さんは御岳山と私の登山史は深い関係があると話し。ヒマラヤに登れる時期を待ちながら、奥

多摩の尾根を歩き女性登山史作りを考え「山と溪谷社」に掲載した。

ヒマラヤ登山にも目的を決めて、後れた女の登山は全員笑って帰れる登山を定義づけ、全員登山、男女混成、さらに登山プラス医療班を編成して診療所を開設、現地人の生活状態を知り、燃料に使われた木々を増すべく植林を

したり、手作りで未知の山に闘志を燃やしている様子が伝わってきた。

五人目の児玉俊子さんは「女性登山家人物史」について調べていること。

安川茂雄さん、山崎安治さんのお二人に巡り合つて登山史に興味をもち、著作もないので作することを勧められた。不自由な時代の費用の捻出、社会

背景、山に登りたい情熱はどこからきているか、スポーツアルピニズム以前の方達に付いて、深く掘り下げて調べているのでひとりでは歩かないが、資料集めの協力を依頼してお話は終わった。

五人のパネラーの方達のお話を真剣に聞いて、十分休憩の後、戦前、大阪のクラブエーデルワイスに入会していらした浅野初子さんから、関西の女性だけの山岳会の様子を聞いた。山に行きたい一心で平日に女性だけで歩いている会「でんでん虫」企画から交渉、ガイドからポーター迄を一人で頑張っていることなど楽しそうに語り、のびて荷物を持って貰うとナメクジになると話されて一同を笑わせたところで、本日のテーマは終了した。

質問と雑談に移り、女性の登山に関わる話題を論じ合った。時代を考えたが人を喜ばせる感動、生きがいを感じ、後輩を育てることも大切「資料委員会」に協力して女性登山史を調べ続けよう。

基本だけはしっかりと事故を起こさないように。山は楽しく難しいことばかり言わない女性懇談会にしましょうとなり、思いがけない程盛り上がった集会の全てを終わり、夕餉の膳を囲み宴会は九時迄楽しく続いた。

翌日は明け方の地震で一度は目が覚

めたが、涼しい御岳山の一角で、猛暑の連続だった今夏の睡眠不足を取り戻す位良く眠り、朝飯のお粥も美味しくておかわりした人も多かった。参加者四十八名。

Aコースの御岳→大岳山奥多摩 四名
Bコースの日の出山 八名

Cコースの大塚山鉄五郎尾根 一六名
Dコースの御岳神社参拝鳩ノ巣 八名
四コースに別れてそれぞれ奥多摩の山を楽しみながら解散となった。

(里見清子)

新郷村(青森県)における

第一回ウエストン祭

松島静吾

上高地をはじめ、全国五ヶ所で行われているウエストン祭が青森県において本年十月十日初めて開催された。

事の発端は、ウエストン研究家の三井嘉雄氏(会員番号九七一六)が、明治三十六年三月十四日付の英字新聞「ジャパン・ウィークリー・メール」

などの記事をもとに、ウエストンが投宿したと思われる青森県三戸郡新郷村戸来(へらい)郵便局に四年前に照会をしたことに始まる。戸来郵便局ではかつて代々局長を務めた同村、戸来牧人氏に手紙を転送した。牧人氏の娘従

(ヨリ)氏、夫の彌(たたる)氏(一〇五一八)が牧人氏から聞き取りをしたところ、十一歳の時に外国人が来て泊まり、父(喜代治氏)がもてなした」と記憶していたこと、ウエストンが灰皿と間違えて使った焦げついた輪島塗りの丸盆が残っていたことなど、三井氏の推測を裏付ける結果となった。

三井氏の調査によれば九十年前の明治三十五年は、岩手、福島、宮城など東北各県が冷害に見舞われたが、とりわけ青森県南地方は被害甚大で大飢饉に襲われた。翌年明治三十六年二月頃には飢饉に瀕する人々の状況が報道され、横浜居留外国人らはいち早く「青森飢饉救援基金」を設立して募金を呼び掛け、同年三月ウエストンとパロットを現地に派遣したという。二人は雪の悪路をたどって被害の惨状を視察し、直ちに米、味噌、毛布などを取り寄せて、餓えと寒さに苦しむ住民に配布した。米は六斗入り四九三袋、味噌十二貫目入り二九〇樽、毛布三九〇枚もの量であったとこのことで驚嘆の極みである。

この史実を知った吉田(戸来)彌氏の「国境を超えた人類愛を永遠に顕彰したい」という願いは村当局を動かし、このたび戸来家邸内における顕彰碑建立と新郷村における第一回ウエストン祭の開催となったものである。なお、



ウェストン碑前にて

新郷村村長木村弥太郎氏(会員番号一〇六六二)、同村議会議長小坂正男氏(会員番号一〇六五四)の本会へのご入会は、ウエストンに対する同村の感謝の気持ちを如実に示すものであり、まことに喜ばしくその意気込みを強く感ずるものである。

第一回青森ウエストン祭は本会会長代理として岩手支部長中谷充氏にご臨席をいただいて左記のとおり行われた。

第一部

W・ウエストン師顕彰碑除幕式と碑前祭

日時 平成四年十月十日(土)午前九・

三〇(一〇・〇〇)

場所 新郷村大字戸来字館神三一史跡「ウエストンの宿」

開会のことは

顕彰碑除幕

献花 献歌(ウェストン祭の歌)

黙禱

祝辞 村長 木村弥太郎殿

日本山岳会会長 山田二郎殿

(代理中谷充殿)

「ウェストン友の会」発足と誓いの
ことば参加者斉唱(雪山賛歌、今日の日は
さようなら)

閉会のことば

第二部

会場 間木の平グリーンパーク 野外

ステージ

シンポジウム テーマ「明治の青森大

飢饉とウェストン」

講師 三井嘉雄氏

第一部、第二部とも折しもふるさと
祭の中、多数の関係者、村民、県内在
住日本山岳会会員の参加をえて盛大に
とり行われた。このウェストン祭は長野県上高地、
堀金村、新潟県青海町、山梨県芦安村、
宮崎県高千穂町につづいて六番目のも
のとして今後とも行われることにな
った。予定された行事終了後、三井氏と、
同じくウェストン研究家の神奈川県か
ら馳せ参じていただいた田畑真一氏を
囲んで、ささやかながらも県内在住本
会会員の初めての会合が持たれたこと

もその意義を思うと少なからず大きな
ものがありそうである。以前、松田雄
一副会長からウェストンの青森県への
足跡を教示いただいた時感じたよう
に、青森支部結成が共通の話題となっ
たからである。

「谷川岳山麓撮影会」

に参加して

戸谷 忍

フォト・ビデオ・クラブとフィルム

・ビデオ委員会との共催による第一回
撮影会が七月十一・十二日、谷川岳山
麓で開かれた。参加者二十一名。梅雨
期の撮影会だけに成否が心配だった
が、思ったより天気が良かった上に、
撮影会に先立って山岳写真セミナーや
お楽しみ抽選会も開かれ、なかなか実
り多い撮影会となった。七月十一日、
谷川岳山麓は曇りながらも緑と清流が
さわやかな気持ちのいい日和となった。
午後四時ごろになるとセミナーの会場
兼宿泊所の「土合山の家」には、カメ
ラやビデオ機材の入ったザックを背に
次々と老若男女の会員が集った。

初日のメイン・イベントは午後五時
半からの山岳写真セミナー。講師は日
本山岳写真協会副会長でもある羽田栄
治フィルム・ビデオ委員長。話はワイ
ドレンズや望遠レンズの使い方など実

戦的なもの。しかし、羽田氏の話を一
層効果的なものにしたのは続いて行わ
れたスライド映写会であった。山の四
季を写した川嶋新太郎委員の力作を上
映したもので、溪流を高速とスロー
シャッターとで撮影したものをつけて
映した時など、会場から「もう一度見
せて」との声飛びだした程だった。
夕食後は元日本テレビ・ディレクター
森宏子(委員)さんが「ビデオカメラ
の撮影」について語りセミナーを締め
くくった。

二日目は撮影会。コースは土合から
旧国道を通過して一ノ倉沢合まで行き
湯檜曾川沿いに下るといふもの。この
コースにはブナの原生林、アジサイ、
清流と撮影テーマがいくつもあった
が、多くの人が狙っていたのは一ノ倉
沢合から見る岩と雪渓であったと思
う。その出合についたのは午前九時半。
しかし、正面の岩壁は大部分、白い雲
に覆われ、下部の岩と雪渓をのぞかせ
るのみ。正直、落胆は隠せなかった。
記念にシャッターは切ったが後は石に
腰掛け、お茶を飲む人、アメをしゃぶ
る人。ところがである。三十分後ごろ
だったろうか。白い雲が動き出し、鋭
角三角形の大きな岩が現れた。他の岩
が白雲に覆われているだけに三角岩に
は孤高の美しさがあった。すぐにカメ
ラの列が出来た。川嶋さんの話では三

角岩は衡立岩だという。昭和三十五年
の宙吊り事件を初め、多くのクライ
マーの命を奪った険しい岩だったの
だ。

しかし五分も経つと衡立岩は再び白
雲に覆われ二度と姿を見せることがな
かった。それは劇的といっても良い感
動的な出来事だった。岩場に別れを告
げて帰途につくころには雲が広がり、
雨になってきた。

自然保護委・

ライオンズクラブを支援

自然保護委員会では、去る十一月八
日、高尾山においてライオンズクラブ
の活動を支援した。

ライオンズクラブ国際協会第三三〇
一A地区第八リジョンでは「高尾山の
自然観察と山をきれいにする活動」を
企画。当JAC自然保護委員会がこの
主旨に賛同し、全面的にこの活動を支
援することになった。

当日の参加者はライオンズクラブ側
からは本郷、池袋、文京など東京北部
の各リジョンより一八一名(申込み
数)、JAC側からは二十一名。高尾
山に登る五コースで午前九時より行わ
れた。前日まで台風二十八号の影響で
心配された天気も、やや風は残るもの



一丁平でのライオンズクラブのセレモニー

の台風一過の晴天に恵まれた。

京王線高尾山口駅前広場に集合した一行は、池田自然保護委員長の挨拶と本日の行動予定その他の説明のあと、事前に自然保護委員によってセットされた弁当、オレンジジュース、菓子、パンフレット、マナーノート、ゴミ袋などを受けとり、各コースのリーダー（JAC）の指示に従って山頂を目指した。各コースのリーダーは次の通り。

Aコース（一号路―東海自然歩道）
中委員、Bコース（琵琶滝―二号路―三号路経由）
麦倉委員、Cコース（琵琶滝―二号路―四号路経由）
市川委員、Dコース（琵琶滝―六号路経由）
山口（悠）委員、Eコース（稲荷山経由）

山口（俊）委員。最終集合地点一丁平には予め池田委員長はじめ渡辺（正）、関塚、横山、中村（武）、遠藤各委員が待機。

老若男女、そして子供の混じった一行は杉の緑とイロハかえでの紅葉の美しいコースを自然を楽しむとともにゴミを拾いながら登山、五九九・〇三の二等三角点そして人混みの山頂から奥高尾、もみじ台を経て集合地点一丁平へ。そして昼食。

予定より三十分ほど早い十二時三十分よりL・C主催のセレモニーが行われた。L・C側の司会は成瀬ライオン、JAC側は池田委員長。ライオンズ・クラブ側の挨拶は野村ライオン、清原環境保全委員長、本日の主役中村（武）文京ゾーン・チャマン、次いでJAC側からは大森自然保護担当常務理事よりの挨拶。そのあと高尾山ビジターセンターの米沢氏より「高尾山の自然と歴史」と題する講演があり寒さもあり早めの解散となったが、JAC側としてはさらに山頂までの支援を行い、全員Aコースで下山。その後午後三時より駅前で反省会。とにかく心配されたトラブルやアクシデントもなく全員無事下山を祝うとともに、JAC側としては自然保護に加えてL・Cという登山の素人集団の統卒の難かしさと珍らしいセレモニーに立会うという貴重な

体験を語り合った。

なお、この行事は自然保護委員会では初の試みで、中村（武）委員によるL・C側への呼び掛けにより企画・実施されたもので、当支援に対し、ライオンズクラブより感謝の意をこめ、当会の自然保護活動に対し五十万円の寄付があった。

参加者（JAC側のみ）大森、池田、横山、渡辺（正）、遠藤、中村（武）、中、黒沢、河西、麦倉、澤井、木名瀬、市川、松本、梨羽、山口（悠）、小倉、砂押、渡辺（一般）、山口（俊）、梅本

（小倉 厚）

紅葉の南アルプス・

夜叉神峠、広河原

撮影会に参加して

フィルム・ビデオ委員会およびフォトビデオクラブ共催の撮影会が十月二十五日（日）南アルプス山麓にて行われた。

撮影会は、夜叉神峠と野呂川・広河原班の希望コースに、それぞれ別れ、甲府駅より同じバスにて目的地に向った。

《夜叉神峠班》

川嶋新太郎氏（フィルムビデオ委員）の指導のもとに紅葉の美しい南アルプスに足を踏み入れた。山は昨夜来

の雨も上がり、絶好の登山（撮影）日和となり、黄・赤・緑の美しいコントラストを織りなし、あたかも錦の衣を着飾っているようだった。紅葉の最も美しい季節と好天に恵まれ、登山者も一際賑わっていた。峠までの道は、樹林帯でフナ・リョウブ・ミズナラ、唐松、カエデ・もみじ等の落葉樹が多く見られた。

道すがら委員の一人に、いろいろな植物の名前を教わりながら、色づいた秋の山々を、思い切り撮影した。峠までの道程は、約一時間ぐらいで、疲れを知らぬうちに峠に着いた。白峰三山の稜線は、既に多くの雪を頂き、大きく聳え立っていました。

川嶋委員より撮影のポイント説明をうけ、各自が思い思いにカメラのシャッターを切り、ビデオを廻わした。残念なことに、主峰北岳の頂上は半分雲におおわれ、なかなか全貌を見せてくれない。昼食をはさんで約二時間程頑張ったが、最後まで雲がとれず、思いを残しながら後にした。

素晴らしい仲間とさわやかな秋をみつけて下山した。帰路のバスの中より富士山のとても美しい姿を見ることができ感動した。

参加者 川嶋新太郎（講師）、所彰、田辺史、山口俊輔、石田要久、北村義男、赤羽昭夫、遠田栄、小野里英次郎、

佐々木康之、佐藤英二、佐藤登代子

(佐藤登代子)

《野呂川・広河原班》

遠景の北岳は白く、空は碧い。前山の谷はあくまでも深く、全山紅葉である。

見た目には素晴らしいが恐ろしくむづかしい被写体であらう。

要所、要所にバスを停めて撮影にかかる。三人の講師に教わってシャッターを切る。

広河原から大樺沢を登る。バットレスに近付いて、いい位置を見付ける実物教育の意図だったが登っている途中で急に雲が下りて来てバットレスを隠してしまった。

参加メンバーはいろいろだから、次には沢山参加して下さい。

今日も自分のカメラの使い方を講師に尋ねていた人から、F1にアングルファインダーを付けて眼光炯炯の人まで幅が広がった。

撮影会ことにレベルが上って来て、一般に乱写乱発ができる程度にまで近付いたようだ。

参加者 羽田栄治、森宏子、上北和夫(以上講師)、嶋原一男、穴田雪江、渋谷千秋、松丸秀夫、石井恵美子、川善市、川朋子、原田衛、中村静雄、松本恒廣

(松丸秀夫)

三水会現地集会

秋の五郎山

三水会恒例秋の奥秩父シリーズ、今回は五郎山で実施した。

この五郎山、二二三の標高を持っているから、訪れる人も少ない。静かなる山(川崎・望月・山田・中西・横山共著、昭和五十三年茗溪堂刊)でも不遇の山とされている。

十月十八日、前日の予報に反して素晴らしい好天に恵まれた。前夜宿泊した白木屋旅館のマイクログで、常楽院平にある、町田市自然休暇村まで送ってもらう。

ここから辿る五郎山林道は、車の通行も絶えたのか、雑草が生い茂っていた。やがて五郎山入口の標識と、休暇村の設置した③から始まる木杭があり④から一本調子の急登が待っていた。登山道は整備されており心配はないが岩稜地帯を攀じたり、スリル万点である。ただし、多人数の場合、落石に注意しなくてはならない。

マキヨセの頭が①となるのか、直下に②があった。マキヨセの頭は、四つの岩峰の最初の突起だが、ここに五郎山頂上との標識。これは誤りだ。

展望は小川山、金峰山から国師岳、

甲武信岳に続く奥秩父主脈や、南アの白峰三山、八ヶ岳、佐久の山と雄大。

三等三角点のある五郎山へは、今迄と異なっており、わずかな踏跡がたよりのなる。道はおおむね南側の断崖を避け、北側の樹林帯の中に通じていた。

五郎山の展望も、マキヨセの頭に優るとも劣らない。

帰路は五郎沢下降の手もあったが、忠実に往路を戻った。そして出発点の休暇村で、再びマイクログの迎えを受け、信濃川上まで運ばれた。

天候に恵まれたことと、前記『静かなる山』で、思っていたより遙かに立派で、しかもなかなか手強かった……と記されているように、われわれも同様の実感を持った。

参加者 荒木正弘、荒野康子、乾能尚、岩堀瑞子、大野盛彦、岡野修、木村俊博、齊藤健治、重村清、高田眞哉、田中恵美子、遠田栄・篤子、中村久美子、西本明子、平沢哲臣、山下順子(高田眞哉)

会務報告

十月定例理事会

十月八日(木)十八時半
場所 本会会議室

出席者 藤平、松田副会長、小倉(茂)、大森、大倉、入澤、石橋、小倉(厚)、村井、山口、片岡、関口、藤井各理事、

嶋原、橋本、西村各常任評議員、中島監事

〔委任〕南川、穴田、神崎、伊丹各理事、湯浅常任評議員、飯野監事

◇議事

〔審議事項〕

一、「上高地新山岳研究所利用の手引」案について(小倉茂輝)

(1)利用期間、(2)利用できる方、(3)申し込み方法、(4)利用料金 会員二五〇〇円 非会員四〇〇円、小学生一四〇〇円 団体会員の場合は一名会員料金、(5)山岳資料室 見学無料 開放時間九時〜十七時 承認

※ゴミ処理について再度調査検討する
二、秩父宮記念学術賞推薦について(大森)

A「登山医学の研究と普及に関する業績」(大森薫雄会員)、B「山岳地帯における自然エネルギー利用の実用」(鳥居亮会員)の二編が提出されたが、本年は「登山医学の研究」を推薦することになった。承認

三、会長特別表彰内規案について(西村)承認

(1)表彰対象を会員にとどめず非会員も含める。(2)必ずしも登山に限定しない。承認

四、勸植村記念財団より
A植村直己関係資料の提供、Bナムチャバルワ登山隊資料の提供、の二点

につき協力依頼があった。

ナムチャバルワ登山隊個人装備等については費用もかかるため、資料委員会が窓口になり財団と調整する。

承認

五、会報編集委員会委員追加の件(小倉厚)

六四九三番奈良原町子会員を追加する。

承認

〔報告事項〕

一、ナムチャバルワ登山隊について

(松田)

順調に進んでいる。十月九日から登頂体制に入る。

なお、名誉総隊長隊について橋本常任評議員ナムチャバルワ気象観測について大森常務理事から報告があった。

二、山研改築について(小倉茂輝)

九月二十八日 上高地へ、次回は十月二十二日に行く予定。順調に進んでいる。

三、募金について(石橋)

企業(九月三十日現在) 一六七社

四八、〇七六、〇〇〇円 未収金 一六社 二、一七六、〇〇〇円、会員(十月六日現在) 一、八一一人 二八、九

〇八、一二九円、女性懇談会 六、一九七、九七九円

四、(A)財務予算半期の執行について

(大倉)、(B)ナムチャバルワ登山隊中間監査について(西村)

五、青森ウェストン祭について(小倉茂輝)

UIAA松本大会と同日のため岩手支部長中谷充会員に出席をお願いした。

六、ヒマラヤマウンテンアリングアンドトリズム ヒマラヤ観光会議

報告(大森)

七、「山里デッサン館」オープンパーティについて(十月一日・勝沼)

(松田)

八、会員名簿作成について(藤井)

九、「アンターティックウオーク隊」日程について(村井)

十月十九日出発、二月七日帰国予定

〔各委員会報告〕

総務委員会 ①全国支部懇談会現況報告、②新入会員懇談会開催(十月十九日)

資料委員会 ①松本民族資料館に委託中の絵画二点を引き取り修復する。②資料台帳がほぼ完成したので棚卸し中

フィルムビデオ委員会 ①十月二十五日(日)南アルプス撮影会を行う。

集會委員会 ①講演会「森を読む」大場秀章講師 十月十四日 ルーム、②平成五年一月十五日・十七日 八方尾

根懇親スキー現地打ち合わせを十月十日・十一日現地で行う。

青年部 ①アンタークティック隊壮行会(十月二日) 二二〇名出席し盛会で

あった。②アムネマチン峰報告会(十月七日)、③小川山集會(十月十七日・十八日) 学生部と共催

学生部 ①定例委員会、九月二十九日に開催した。②中大パミール登山隊報告会(十月二十七日)、③マラソン大会(十一月八日)

《新入会員承認》 小泉武栄他十六名

次回理事会 十一月十二日(木)午後六時三十分、場所 日本山岳会会議室

・ルーム日誌

(10月)

5日 総務委員会、フィルムビデオ委員会

6日 山研委員会、アルパインスケッチクラブ

7日 青年部、学生部

8日 常務理事会、理事会

12日 アルパインスキークラブ

13日 指導委員会、学生部、アルパインスケッチクラブ

14日 集會委員会

15日 図書委員会、科学研究委員会、会計監査、女性懇談会

16日 フィルム委員会

19日 新入会員懇談会

20日 自然保護委員会、学生部、山研委員会

21日 三水会、図書委員会

23日 アルパインフォトビデオクラブ

24日 図書交換会

27日 自然保護委員会、学生部

28日 指導委員会、集會委員会

10月来室者588名

・異動

・物故

吉田勇(二三三〇) 9・9

終身会員

村岡昭三(三三八〇) 10・17

山研・ナムチャ合同募金応募状況

(十一月七日現在)

(四十口) 半沢紀子(非会員)、(二十口) 高橋俊紀、(十五口) アルパインスケッチクラブ、(十口) 小倉茂輝(計三十口)、竹田寛次(計二十口)、中村

義(計十四口)、(六口) 坂本観晃、(四口) 村上勝太郎(計八口)、佐々木豊

喜、(二口) 長谷川龍雄、吉川尚郎、井

本浩之、片岡濱子、三宅伯二郎、湯口

康雄、後藤傳、高堂真一、鈴木常夫、

内海孚、三枝守雄、白子廣兵衛、伊佐

九三四郎、山崎勉、遠藤京子、本間美

智子、(一口) 小川泰平、河西俊郎、子

吉格郎(計二口)、小畑恵市、田邊彰、

大竹義信、山口裕一、伊藤茂、井後幸

太郎、赤石喜恵子、小野季子、稲葉鞠子

(累計一千八百四十八名、五千九百三

十・六口、二千九百七十二万三千百二十九円)

なお、十月号ご芳名のうち、金澤善八は金澤喜八の誤りでした。お詫びと共に訂正いたします。



この電話で
もお知らせ
しています

●ナムチャバルワ初登頂

テレビ放映のお知らせ

ナムチャバルワ初登頂のテレビ放映は、NHK総合テレビにて、来春正月二日、十九時十五分～二十時四十五分の一時間半番組、NHKスペシャルで「ナムチャバルワ再挑戦」のタイトルで放映されます。ご期待下さい。

●第二回アルバインスケッチ

クラブ展のお知らせ

アルバインスケッチクラブでは第二回クラブ展を渋谷の東京電力電気温水器センターギャラリーにおいて、一月二十二日(期日一日繰下げ、要注意)から二十六日まで開催いたします。

スケッチ山行等による一年間の作品をご高覧下さるよう、多数の皆様のご来場をお待ちしております。

アルバインスケッチクラブ

●第八回国際低酸素シンポジウムのお知らせ

中島道郎

二年ごとにカナダのレイクルイーズで開催されている表記のシンポジウムも、回を重ねてこれで八回目になります。このほど左記の要領で開催されることになったとその事務局から連絡がありましたので、ご案内致します。

このシンポジウムのことは、これまで、その都度本紙上でご案内・報告してきましたので、ご存知の会員も多いと思いますが、『低酸素症(ハイポキシア)』シンポジウムといっても、実は『高所医学』が中心のシンポジウムです。日本からの参加も多く、前回などは展示発表の四分の一は日本からのものでした。医学者のみならず、普通の登山家も大勢参加しているシンポジウムであることを強調しておきます。

記

時 一九九三年二月九日(火)～十三日

(土)

所 カナダ・アルバータ州レイクルイーズ

書籍・雑誌 受入報告 1992年9月

著者	書名/雑誌名	版型・ページ	出版元	出版年	寄贈/購入別
山と溪谷社編	日本の山 1000 山溪カラー名鑑	19.5×20.5/766 p.	山と溪谷社	1992	発行者寄贈
阿部幹雄	北千島冒険紀行	A 5/250 p.	山と溪谷社	1992	発行者寄贈
大沢宣彦	大灰色(ビッグ・グレー)	四六判/180 p.	河出書房新社	1992	著者寄贈
THE HIMARAYAN CLUB	The Himarayan Journal Volume 48	21.5×14/248 p.	OXFORD UIVE-RSITY PRESS	1991	購入
慶佐次盛一	兵庫丹波の山(下)	四六判/201 p.	ナカニシヤ	1992	著者寄贈
日本山岳会宮城支部 羊拱山登山隊	日本山岳会宮城支部羊拱山登山報告書	B 5/19 p.	日本山岳会宮城支部	1992	発行者寄贈
Jonathan. Waterman	SURVIVING DENALI	20.5×14/264 p.	THE AAC PRESS	1992	購入
島本達夫	又、穂高岳紀行ほか	四六判/357 p.	北町書房	1992	高橋詢氏寄贈
柴崎徹	宮城の名山	B 6/167 p.	河北新報社	1992	著者寄贈
ブナを植える会編	ブナを植える 十年を振り返って	B 5/181 p.	ブナを植える会	1992	発行者寄贈
平石英雄	山の友に恵まれて	A 5/199 p.	平石英雄	1992	著者寄贈
山里寿男	スケッチの山旅 12カ月	A 5変型判/229 p.	実業之日本社	1992	発行者寄贈
小泉武栄・清水長正 編	山の自然学入門	A 5/178 p.	古今書院	1992	発行者寄贈

参加費 四一〇米ドル

会場 ホテル、シャトー・レイクルイー

ズ

宿泊費 一人一泊三食付、シングル一

四一カナダドル、ツイン九九

カナダドル

参加申込用紙請求先

Ms. Ingrid Ellis

Conference Coordinator IM10

McMaster University

1200 Main Street West Hamilton,

Ontario, Canada, L8N 3Z5

詳細は左記中島までお尋ね下さい。

電話かファックスが便利でしょう。

〒551 大阪市大正区北村三丁目四一五

大阪府済生会泉尾病院 中島道郎

☎〇六―五五二―〇〇九一代

Fax 〇六―五五三―八八二四

●雪山現地小集会

「黒斑山」のご案内

集会委員会

昨年トライして果たせなかった雪の「黒斑山」を再度チャレンジします。

輪カンまたはシール(スキー)で登ります。準冬山装備が必要です。

登る山 黒斑山

期日 平成五年二月二十日(土)～二十

一日(日)一泊二日

宿舎 高峰温泉

定員 二十名(先着順締切)

会費 一三、〇〇〇円(交通費別) 宿泊、

保険、写真代を含む

申込み 一月二十日迄にハガキで事務

局気付 集会委員会あて

(担当 川)

●後藤三男油絵展

—信州の山と安曇野を描く—

日時 平成五年一月十五日(金)～二十

日(水)

場所 東急日本橋店六階 美術画廊

編集後記 ◆今年はナムチャバルワの初登頂、そして新山研の工事も順調でまことによい年だった。歳月のたつのは早い。もはや年の瀬となった。また来年に向けて頑張ります。どうか皆さんよいお年を。(A・O)

平成四年十二月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五一四

サンビュウハイツ四番町

発行所 社団法人 日本山岳会

発行者 山田二郎

編集代表 小倉厚

電話 東京(326) 四四三三

振替口座 東京三―四八二九番

東京都港区赤坂一―三―六

印刷所 株式会社 技報堂